

キマダラルリツバメの 人為的分布拡大の可能性

谷角素彦・足立義弘

1985年6月1日、兵庫県養父郡関宮町のチップ工場内の材木置場でカミキリを採集していたところ、材（樹種不明の広葉樹）の上で、アリに囲まれたキマダラルリツバメ *Spindasis takanonis Matsumura* の終齢幼虫を発見した。足立が京都に持ち帰り、飼育を行ったところ、6月20日に1♀が羽化した。

ところで、この幼虫の母蝶はどこで産卵したのだろうか。考えられるのは、関宮町の材木置場か、材を切り出した所である。キマダラルリツバメが伐採された木に産卵する例は聞いたことがないし、またチップ工場の材は全体に新しく、長期間放置されることはなさそうである。したがって、材木置場がこの蝶の発生地である可能性は低い。むしろ、材の産地で生木に産卵されたものが成長し、伐採された材とともに、チップ工場に運ばれてきたと考えるほうが妥当であろう。後日、工場の人々に、材をどこから切り出してくるのか、と尋ねたところ、兵庫県の奥竹野、温泉町照来、一部は鳥取方面からも入ってくる、との返答であった。鳥取にはこの蝶の産地が多い。一方兵庫県北部では数ヵ所からしか記録されておらず、現時点では上記地域からは知られていないが、採集した幼虫の故郷はこれらのうちのどこかにちがいないであろう。

近年、各地で伐採がさかんに行われており、キマダラルリツバメのような生活史をもつ蝶にとっては、発生木が運搬されることによって分布を拡大する機会が増え、他の地域でも同様な事例が発生していることが予想される。キマダラルリツバメが材とともに運ばれて、分布を拡げていく可能性もあると考えられるので、報告しておく。